



ふれあい遠足行われる



6月16日（火）に、前日の豪雨と突風で天気が心配されましたが、予定通りふれあい遠足を実施することができました。赤城団は新川公園へ、浅間団は吾妻公園へ、榛名団は陸上競技場へ、妙義団は水道山公園へ行きました。このふれあい遠足は、団全員が仲良くなり、団結力をアップしようとする活動です。上級生が下級生の面倒を見ながら和やかな時間を過ごしました。このふれあい遠足をきっかけに、団結力を高め、各団、運動会での優勝に向けて頑張ってほしいと思います。



全校朝会での話（6/12）

皆さんおはようございます。皆さんは、心にとびらがあることを知っていますか。だれにでも心にとびらがあるのです。しかも、そのとびらは、外側にしか開きません。そして取っ手もついていないのです。だから、一度閉まってしまうと、他の人がどのように強い力で開けようとしても、絶対に開かないとびらなのです。

人は、どのようなときに、心のとびらを閉めてしまうと思いますか。それは、お友達からいじめられたり、仲間はずれにされたり、いたずらをされたりしたときなのです。では、どのようにしたら心のとびらは開くのでしょうか。実は、心のとびらは、内側からは開くのです。心のとびらが内側から開く様子は、ちょうどお日様の暖かさに誘われて花が咲くの に似ています。心のとびらを閉めてしまったお友達には、お日様の暖かさが必要なのです。では、お日様の暖かさってなんなのでしょうか。

皆さんは、イソップ物語の「北風と太陽」のお話を知っていますね。「北風と太陽が、『旅人のマントをどちらがぬがせることができるのか競い合おう』と話し合いました。はじめに、北風が試みしました。北風は、強い風をブンブン起こし、マントをぬがせようとしてしました。しかし、旅人は、マントをしっかりおさえて放しません。次に太陽が暖かい日差しを旅人に注ぎました。旅人は、ポカポカ暖かくなってきたので、マントをぬいでしまいました。こうして、北風と太陽の勝負は、太陽が勝ちました」というお話ですね。

人の心のとびらを開くのは、このお話に似ています。お日様のような暖かさとは、お友達への優しい言葉がけや態度だと思います。

皆さんの心は、皆さんだけの大切なものですが、それは、お友達や先生、お父さん、お母さんの温かい心や優しい言葉に触れたとき、はじめてとびらが開き、宝物のように輝くのです。

「優しさのシャワーが降り注ぐ学校」「笑顔あふれる学校」。そんな学校を、皆さんでつくりあげていきましょう。

終わります。

●●●●●●●●●● 今年度も道德の授業をやりました ●●●●●●●●●●

6月10日(水)1校時に6年2組で、2校時に6年1組で道德の授業をやりました。昨年度と同じ「ある日の新聞から」という読み物資料を使って、私がパネラー役になって、パネルディスカッション風にやってみました。授業のねらいは「人命救助に命をかけた人間の姿に感動し、自らも人間としてすばらしい生き方をしていきたいという態度を身に付ける」で、6年生一人一人、本当に一生懸命に考えてくれました。学生の行為に対する肯定的な意見や懐疑的な意見を素直に交換し合う中で、自分と友達とのものの見方や考え方を比較することを通して、自己の生き方を見つめさせることができたのではないかと思います。授業の最後に、「人間の生き方という点で、学生の行動から感じとったこと」を書かせました。その一部を紹介します。

○私は、この学生の行動はすごいと思いました。私は、この学生みたいな行動はできないと思いました。自分の命をかけても助けるなんて私はこわくてできません。とても感動しました。母親の文章を読んで、さらに感動しました。私は、この学生の行動はとてもすごいと共感しました。

○人間は、良いことも、悪いこともするんだなと思いました。自分とは関係ない小さな命でも、救おう、助けようと思う心、自分を犠牲にしてまで海に飛び込む勇氣、思うことはできるけど、実際、実行するのはむずかしい。学生の行為はとても立派だと思う。けど、他に方法があったのではないかと私は思う。私たちは、この学生を見習って生きていかなければならないと思う。

~~~~~ 「確かな学力」の育成にご協力を②⑥ ~~~~~

私がクラス担任をしていた時に、生活指導でまず取り組んだのが、家庭でのテレビ(その当時は、ゲーム機はありませんでした)の視聴時間を短縮することでした。今から約30年前のことなので、なかなか当時のことを思い出すのは大変ですが、確か子どもたちの生活実態を調べ、その結果テレビの視聴の時間が長い子ほど、睡眠時間が短くなっていました。睡眠時間を削ってテレビを見ていたのです。現在で言えば、ゲームでしょうか。(私の6歳、5歳、3歳の孫たちは、本当によくゲームをやっています・・・。1歳の2人の孫たちは、スマホをいじっていますが・・・。)逆に言えば、テレビの時間を削ることは、睡眠時間を増やすことにつながる、というわけです。しかも、テレビを削って増えた時間は、読書にもつながりやすいのです。テレビを見るかわりに読書をするようになれば、睡眠時間の減少というマイナス要因が、読書というプラス要因に転化されるわけですから、生活に劇的な変化が表れてくることは間違いありません。

また、テレビを消すことには、もう一つ効果があります。それは、我慢することを覚える、ということです。我慢したり、何かを克服したりという体験は、是非とも子ども時代やっておかなければならない、重要な心の勉強です。確か、川島隆太先生の本の中に、我慢することによって脳の中の、特に人間の中核となる前頭前野が活発化するとありました。だから、テレビの視聴をセーブするということは、人間を人間たらしめる作業にはかならない、とさえ言えるのではないのでしょうか。だから、その時私は「テレビの時間を削れば、それだけ学力は伸びる」と思うようになりました。その一つの試みとして、本校では、学期に1回、家庭学習定着のために、家庭学習週間「学びウィーク」を実施しています。1学期は、7月3日(金)より実施します。授業参観で、各担任から「学力向上のために～家庭学習のすすめ～」が配布され説明があります。家庭学習の方法や内容等について書かれていますので、是非授業参観後の懇談会にも出席ください。そして、家庭学習週間のご家庭でのご協力をお願いいたします。

さて、「テレビを見ないと、友達との話題に乗り遅れる」とよく耳にします。確かに子どもにとって、友達関係は大事なものです。しかし、自分が善いと思うような生き方や、こうあるべきだと思うことを捨ててまで、友達に迎合する必要があるのでしょうか。ゲームやテレビのために仲間外れになるのなら、大いに仲間外れになって結構。そのほうが、仲間外れに耐えられる力をつけられる。そう思うくらいの気持ちで、ちょうど良いのではないのでしょうか。「友達というから、コミュニケーション能力がつく」とも言われますが、私はこれも錯覚だと思っています。こう言えるのも、実は、私の小さい頃の体験があるからです。何かと言いますと「うちは特別だ」と言うのが、親の殺し文句でした。それを常日頃から聞かされていたから、私も、他人がどう言っているかと「自分は自分だ」と思えるようになったのです。その結果、子どものときはよく仲間外れにされましたが、孤独には結構強くなりましたし、今はこうして多くの人たちと信頼関係を築けるようになったと自負しています。それも「自分は自分だ」と思えるようになったお陰です。

「泥水」を流し込んでくるような友達なら、むしろいない。そんな関係は断ち切った方がいい、と思った方がよいのではないのでしょうか。人を幸福に導くものは冷静に考え、その判断の下に行動できる人間に成長していくことのほうが、他人に迎合するよりもずっと重要なことだと、私は信じています。